



Social・Forestry Ina city
ソーシャル・フォレストリー都市 “伊那市”



長谷鹿嶺高原より市域を望む

伊那市50年の森林(もり)ビジョン
～概要版～

平成28年

伊那市



伊那市の魅力と森林・林業を考える

伊那市の魅力は？

移住しやすい街・子育てNo1の街

『日本「住みたい田舎」ベストランキング!の「子育て世代にピッタリな田舎部門(宝島社:2015年、2016年2月号)」の第1位!』
全国約320自治体の中から、最高評価にあたる3つ星AERA(アエラ:2015)!

歴史・文化

特色ある伝統文化「やきもち踊り」や「羽広の獅子舞」、「高遠ばやし」や「灯籠まつり」、長谷地区の「中尾歌舞伎」など!
多様な人材を育成!
高遠城址は日本100名城、「天下第一の桜」の名所!

食文化

信州そば発祥の地、ザザムシ、蜂の子、イナゴ、馬刺し、ソースカツ丼、ローメンなど、伊那の食文化は他を寄せ付けないほど魅力的!

南アルプス・中央アルプス

伊那市の東側には仙丈ヶ岳、東駒ヶ岳(甲斐駒ヶ岳)、鋸岳を中心に南アルプス国立公園が、西側には将基頭山が聳え、両アルプスの山岳登山の重要なポイント!

天竜川

諏訪湖を源流とする天竜川が市域中央を流下し、南アルプス・中央アルプスの両山域から、棚沢川、小沢川、小黒川、三峰川、戸沢川、小戸沢川、犬田切川、猪ノ沢川、藤沢川が流入し、天竜川沿いに肥沃で特徴ある地形を形成!

南アルプス(中央構造線エリア)ジオパーク

起伏に富んだ地形と複雑で多様な地質構造で2008年12月に日本ジオパークに認定!

ユネスコエコパーク

南アルプス一帯は、生態系の保全と持続可能な利活用の調和(自然と人間社会の共生)を目的とした「ユネスコエコパーク」に登録(2014年6月)!

伊那市の森林・林業・木材産業の魅力は？

天然カラマツ

日本のカラマツの天然林の分布は、極めて狭く、伊那市は数少ない通称「天カラ」と呼ばれる天然カラマツの生育地!

マツタケ

伊那市は県内有数のマツタケ生産地!

環境教育のフィールド

伊那市内の小中学校をはじめ、東京都の小学生や高校生など、様々な環境教育が伊那市の森林で実施!

伊那マツ

伊那市のアカマツは、従来から「伊那松」というブランド!

木質バイオマス先進地

薪・ペレットストーブ導入は全国トップレベル!

ウッドスタートとウッドエンド

全国に先駆けて、赤ちゃんに木のぬくもりを感じてもらい親しんでもらう「木育 “ウッドスタート” 」の取り組みをスタート！

その対となる“ウッドエンド”の発想も魅力！

なぜ今、森林・林業を考えるのか？

伊那市は、電気、精密、機械などの高度な加工技術産業や食品などの健康長寿関連産業が発展し、また、肥沃な土地と豊かで良質な三峰川水系の水をいかした米作りのほか、野菜、果樹、花卉などの農業が盛んです。このように精密工業、食品工業、農業を中心として「バランスの良い産業構造をしている」といわれます。

でもこの産業構造の表現に「林業」は現れません。林業は、知らず知らずの間に「営み」の地位を失ってしまいました。

「エネルギー利用の視点から」

今、私たちの生活は、化石燃料に依存（外部依存）しています。化石燃料依存の現状は、実質的に経済価値の大部分が市内への還元にはなっていません（図-1）。現状の利益の還元は、いわゆる「外部に大きく流出している」ことになっています。直ちに化石燃料依存をやめるとは考えません。また物理的に化石燃料への依存を中止することはできませんが、私たちの生活に不可欠な燃料を、現在の化石燃料依存から、少し回帰（レトロ）して地域内の自然エネルギーに依存することを考えてはいかがでしょうか？

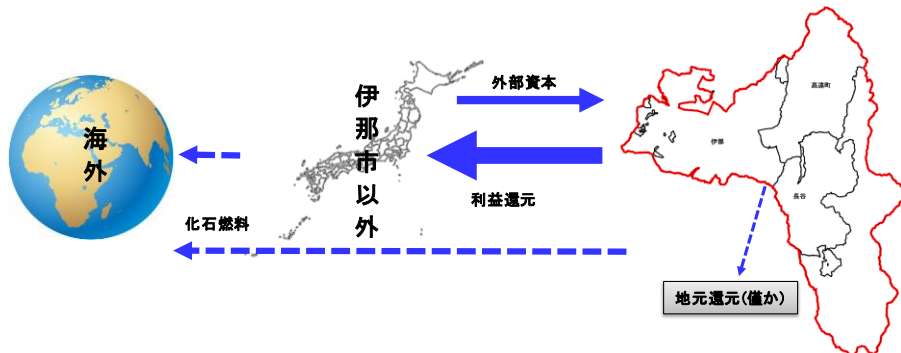


図-1 従来構造による資本還元（模式図）

「地域産業の基盤へ」

木材のエネルギー利用は、外部依存から内部依存、内部循環型となります。また、エネルギー利用だけでなく、地域の森林を木材として市域内で利用することも内部循環型となります。これは地域内の活性化の一因子となることは間違いありません。伊那市の潤沢な森林資源を活用することは、伊那市にとって有効な地域活性化対策と考えられます。伊那市の森林から木材を生産するには「林業」が活性化することが重要です。さらにその木材を市域内で「運搬」、「加工」、「販売」する産業も活性化することが重要です。そして、市民の皆さんが市域の木材を余すことなくカスケード利用^{*}することも重要です。

^{*}1カスケード利用：木質資源の場合、低質な部分や通常廃棄される材や枝条等を単に廃棄するのではなく、多段的（カスケード的）に利用することによって資源として最大限有効に利用すること。

「安全・安心を担う林業」

今、森林・林業を考えるのは、貨幣価値ばかりを求めることではありません。市民の皆さんにとって森林は自然環境そのものです。突然、森林の樹木がなくなったり、崩壊が発生したら、市民の皆さんの安らかな生活に影響が発生します。山地に森林があることは、市域の安全・安心を守ることとなります。だから、森林を育て、利用する林業が市域産業として市民の皆さんに認知されないと、自然破壊と捉えられてしまいます。森林を育て、守るのも林業です。今、林業を市民の皆さんに広く認知してもらうことが必要なのです。

「自然環境と歩む伊那市」

「ユネスコエコパーク」や「南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク」など、自然環境に恵まれた伊那市ですが、これらの優れた自然環境エリアは、そのほとんどが森林に覆われています。これらの自然環境を保全し、後世に引き継ぐためには、森林の取り扱いが重要となります。「守る森林」・「自然環境と共に利用する森林」・「積極的に利用する森林」など、明確にしないとイケない時代を迎えています。だから今、森林・林業を考える時なのです。

「里山と農林業」

伊那市は天竜川やその支流によって肥沃な農耕地を有しています。その後背には里山が広がり、近代的な市域にあって里山の原風景を残す地区も多くあります。里山の自然環境は人間が利用することによって、守られてきました。希少な植物が生育したり、野生動物との緩衝帯（バッファゾーン）でありました。

この里山特有の半自然環境を住民によって再生することが、里山生態系の保全、鳥獣害被害の抑止につながるのです。そのため、農業との連携が不可欠であって、里山の木材を利用する仕組み作り（**農林業システム**）が必要なのです。だから、今なのです。

50年という時間軸で森林・林業を考える時代

「自然資本と伊那市」

自然環境を国民の生活や企業の経営基盤を支える重要な資本の一つとして捉える「自然資本」という考え方が注目されています。「自然資本」は、森林、土壌、水、大気、生物資源など、自然によって形成される資本（ストック）のことで、自然資本から生み出されるフローを生態系サービスとして捉えることができます。自然資本の価値を適切に評価し、管理していくことが、私たちの生活を安定させ、企業の経営の持続可能性を高めることにつながる考え方です。

伊那市の森林を「自然資本」の視点に立って簡単に区分すると以下となります。

- ★第一次産業の資源培養・産物の取得場所
- ★観光・保健・保養等のサービス産業の活動場所
- ★水源涵養・崩壊防止・地球温暖化防止などの公益的機能を担う場所

「自然資本」という視点から、森林は最も「伊那市の自然資本」の主要部を占めることがわかります。ただし、伊那市の人口推移予測などから「自然資本」としての維持・管理を十分に行うことができなくなる可能性があります。

このことから「守る森林」・「自然環境と共に利用する森林」・「積極的に利用する森林」など、明確にしないといけない時代を迎えています。もっと極端に表現すると、「自然に委ねる＝自然に還す森林」と「自然環境を復元しなくてはならない森林」及び「人が利用する森林」を明確にする必要があるのではないのでしょうか。ここでも回帰（レトロ）する思考が必要です。

「自然に委ねる＝自然に還す森林」

あまり人手をかけず、多面的機能を発揮する森林。ただし、市域保全のために治山・治水の管理は必要。

「自然環境を復元する森林」

立地に適合した自然環境を復元・維持し、観光やレクリエーションにも寄与する森林。

「伊那市民が利用する森林」

農林業のために利用する森林。

「50年という時間軸で森林・林業を考える時代」

古くは「孫代のために」といって木を植えていた時代もありました。当時は1代30年として約90年の期間となります。また、全国には「100年の森」といった時間軸でビジョンを設定する場合があります。100年先を見据えることは極めて重要です。

しかし、伊那市には多くの魅力や、森林・林業でも特徴ある魅力がある一方で、早急に検討しなくてはならない事項もあります。そのためには100年先ではなく、1代（生産年齢である15歳～65歳＝50年）として伊那市の将来像を見据える必要があるのではないのでしょうか。

伊那市の森林・林業に係わる50年前を振り返ると様々な変化があり、今後も様々な変化があると思われませんが、50年という時間軸ではその変化に柔軟に対応することも可能と考えます。

さらに、これから伊那市を背負って立つ若者達に、50年という時間軸であれば、50年後（2065年）の森林を確認してもらうことができます。

私たちの周りに広がる森林と伊那市の将来とは密接に係わっています。伊那市の魅力を活かしつつ、森林を単なる経済価値だけでなく、文化的・防炎的・環境的などすべてにおいて伊那市を発展させるために、伊那市の自然を“資本”と捉え、または「自然資本を保全する」ことを考え、50年という時間軸で「社会資本」としての価値を高めて行くことが必要です。

**だから今（2015年）、50年という時間軸で、
森林・林業を考える時代(とき)なのです**

伊那市の森林・林業の現状と課題

伊那市の森林

2015年4月1日現在の伊那市の森林面積は55,074ha、森林率は82%を占めています。このうち国有林が21,707ha（面積割合39%）、民有林が33,367ha（面積割合61%）です（図-2）。

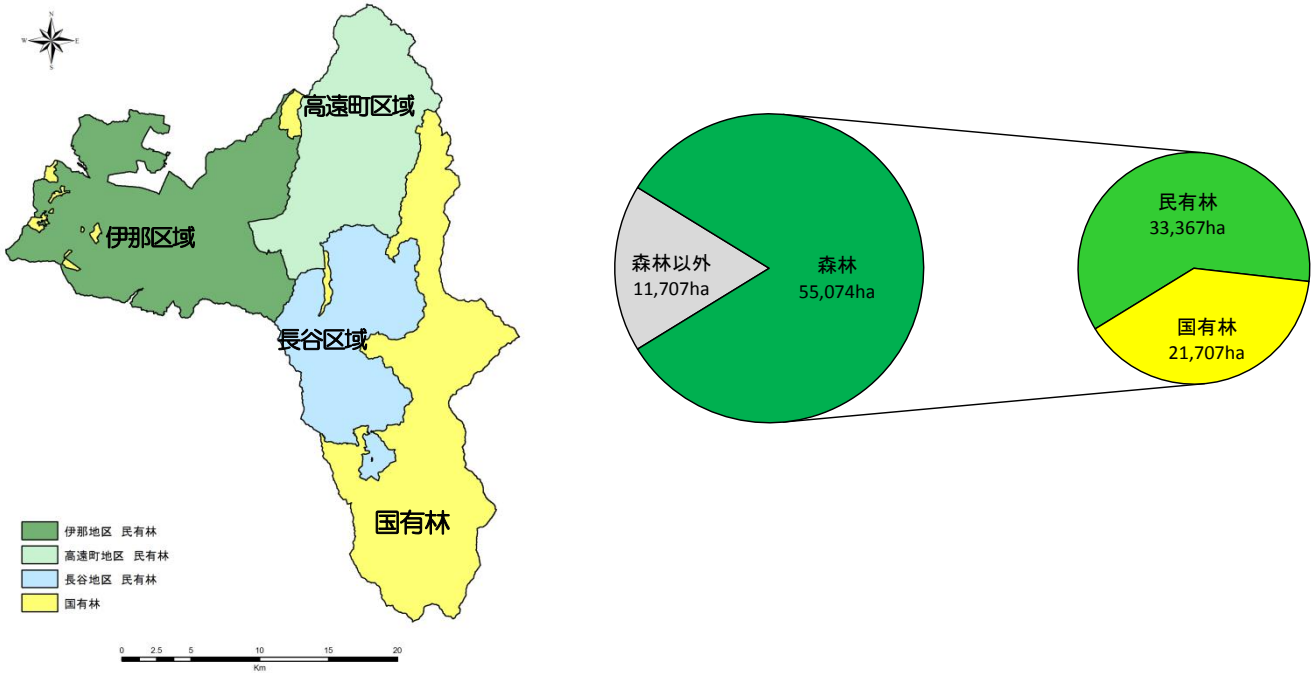


図-2 伊那市の民有林と国有林区分 (2015年4月1日現在)

伊那市民有林の所有形態は、公有林が全体の21%、私有林が79%を占め、個人有林が44%を占めています（図-3）。伊那市の個人有林は、里山周辺に多く分布しています（図-3）。この民有林は、人工林が6割、天然林が4割となっています。民有林の人工林と天然林を合わせた樹種構成は、カラマツが最も多く民有林面積の44%を占めています（図-3）。

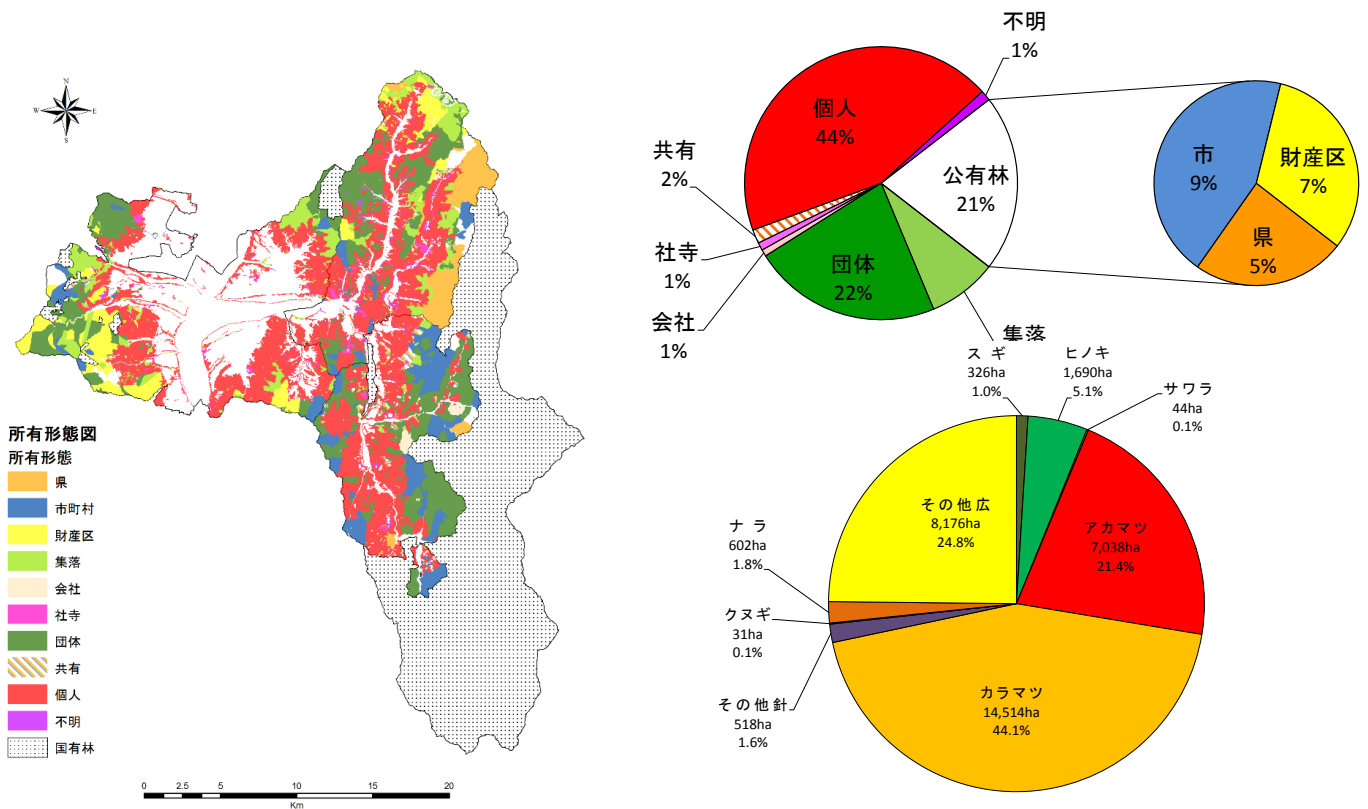


図-3 伊那市民有林の所有形態と樹種構成 (2015年4月1日現在)

森林の状況



写真-1 カラマツの紅葉

伊那に広く分布するカラマツ林。第二次世界大戦後の荒廃した森林を緑にした功績は大いだが、適地適木ではないカラマツ林も多く存在する。

人工林の樹種が偏っている

従来、林業において先人たちは、立地環境を読み取り「尾根マツ、沢スギ、中ヒノキ」というように「山を見て」森林を造り、育て、利用してきました。これは林学研究によって合理的な考え方であることが示され、立地環境に生理的に適した樹木を選定し、植栽を行う「適地適木」が提唱され、実施されてきました。現在の森林、特に針葉樹一斉林（人工林）をみると、確かに「適地適木」とは思われぬ森林があり、そのような森林に共通することは「適地適木」という自然科学的知見以外の‘人為＝施業・経済性の目的’が介在しています。

伊那市の人工林はカラマツが多くを占めています。1600～1800m を超す高標域や田んぼの跡地、河川沿い等にもカラマツの人工林がみられますが、実際にはカラマツが適木でないにもかかわらず、カラマツ林が存在（成立）している場合や、カラマツ以外にも林地に合った樹種ではない「適地⇒不適木」である森林が存在します。もう一度、現実林分を「適地適木」に照らし合わせる必要がある時を迎えています（写真-1）。

林齢（山の木の年齢）が偏っている

伊那市の民有林は45～60年生の人工林分布が多く、蓄積量（立木材積）から見ると、最も成熟している時期にきています。しかし、このままの年齢構成が50年後まで続くと、若齢から成熟期の森林が無く、100年生以上に集中することになります（図-4）。まさしく「少子高齢化」となります。「限界集落」と言われるような「限界森林」がいたるところに分布するようになります。

獣害・松くい虫被害が発生

伊那市では近年、ニホンジカ、ツキノワグマ、カモシカ、ニホンザルの獣害がみられ、突出してニホンジカの被害が拡大しています。



さらに、伊那市は松くい虫の激甚被害地で、至る所に松くい虫被害が確認されています。そのため、アカマツ林が現在、衰退の危機に瀕しています。

度重なる山地災害が発生

伊那市では、梅雨、台風による豪雨を誘因として災害が発生しています。主たる災害は1950年（昭和25年）以降29回が記録され、近年では2006年（平成18年）の豪雨災害が甚大な被害をもたらしました（写真-1）。



36 災害（1961年）



57 災害（1982年）
写真-1 伊那市の災害



18 災害（2006年）

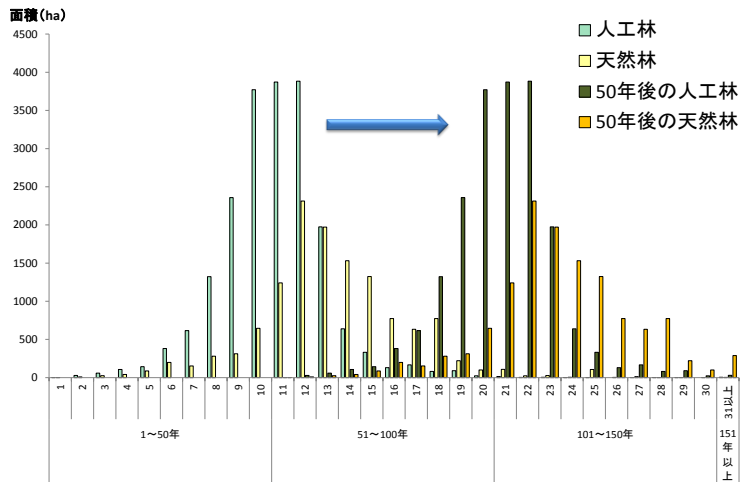


図-4 50年後の伊那市民有林の人工林・天然林年齢構成 (このまま移行した場合)

林業・木材産業の状況

伊那市の林産物

伊那市では森林面積の21.4%をアカマツが占め、里山の原風景の象徴的な樹種としてアカマツ林が多く分布しています。その通直に成長したマツは材質からも「伊那松」と呼ばれ、古くから重宝されてきました。また、このアカマツ林から生産されるマツタケも県内有数の産地となっています。

木材利用が盛んな伊那市

伊那市の新築一戸建住宅の木造率は80%以上となっており、伊那市では木を使う文化・風土が存在していると考えられますが、地域材だけでは限らないため、更なる地産地消が必要となっています。

一方、薪ストーブ普及日本一と推察され、薪やペレット利用の木質バイオマス先進地域となっています。さらに、伊那市は「ウッドスタート・ブックスタート事業」を行っていますし、友好提携都市の新宿区においても、伊那市で作られた木のおもちゃ等の木工製品が新生児の誕生祝い品として利用されています。これらの木材利用等を核として、より一層の地域材活用を考える時が来ています。

森林・林業・木材産業の課題

伊那市の森林・林業を取り巻く状況には、多くの課題があります(図-5)。それぞれの課題を整理すると以下に集約されます。

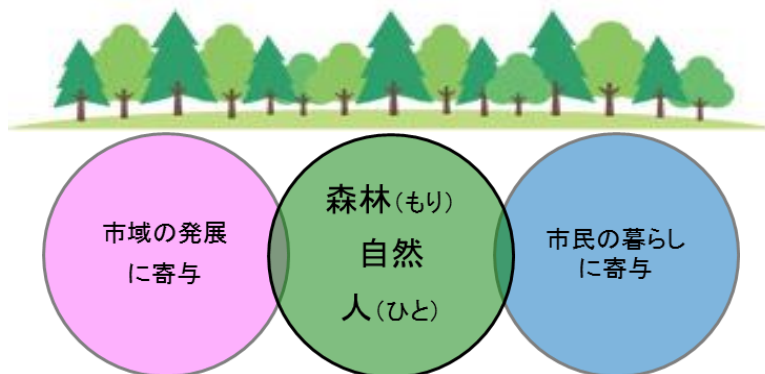
- 📖 資源構成(森林資源・環境資源・人材資源)
- 📖 林業活動エリアと保全エリア(環境・防災)の区分
- 📖 人材育成
- 📖 木材の活用(他産業との連携)
- 📖 産業(農業と林業複合体) ⇄ 木材産業 ⇄ 市民(地域発信) ⇄ 産業への循環



図-5 伊那市における2015年を軸とした森林・林業の課題イメージ

50年の森林（もり）ビジョンの理念と目標

伊那市の森林・自然・人材資源を中核として、里山環境を守る農林業と市民の環境活動を通じ、市民の暮らしと市域の発展に寄与します。



1. 市民生活と共生し、市民が活用できる森林であり続けます。
2. 森林・自然環境の維持と更なる機能向上に努めます。
3. 森林資源・自然環境資源・人材資源を育て、活かし、利用する循環社会を創出します。

山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市



以上の理念のもと、
「社会林業～ソーシャル・フォレストリー～都市“伊那市”」として
50年後の次世代に森林・自然環境・農林業を引き継ぎます。

伊那市の自然・森林を“資本”と捉え、これらを50年という時間軸で「社会資本」としての価値を高めて行くためには、「森林・林業、市民」すべてが一つとなった社会であることが必要です。これは、伊那市独自の「社会林業（ソーシャル・フォレストリー：Social-forestry）」と考えることができます。

「山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市」を実現するために、「社会林業～Social-Forestry～都市“伊那市”」として取り組みます。

【ソーシャル・フォレストリー都市 “伊那市”】

「ソーシャル」とは“社会の”、“社会に関する”、“社会的な”などとして用いられる形容詞です。森林・林業の分野にも「社会林業（ソーシャル・フォレストリー）」という概念が存在します。国際開発援助の分野で、住民参加型の林業によって、自然・生物多様性の保全と地域経済の安定を両立する手法です。

本ビジョンの目標は、森林・林業を「自然資本」とする概念と、市民共通の「社会資本」という概念から、「自然環境・森林資源に対する目標」と「市民が担う目標」を設定しました。「社会資本」は、“社会の信頼関係の社会的ネットワーク”と、“経済発展に必要な社会共通の公共性の下支えの構造（インフラストラクチャー）”の概念を持ちます。

50年という時間軸で、自然環境・森林資源を「自然資本」と捉え、「社会資本」としての価値を高めて行くためには、これらに携わる林業関係者だけでなく、市民が主体となった取り組みが必要ですので、そのすべての取り組みを総称して「伊那市独自の社会林業」と位置付け、それを実行する「ソーシャル・フォレストリー都市“伊那市”」としました。

「社会林業～ソーシャル・フォレストリー～都市“伊那”」として取り組むために、主に関係者が関わる「自然・森林資源に対する目標」と、多くの市民の皆さんが関わる「市民が担う目標」を掲げました。

自然・森林資源に対する目標	■ 生物多様性を中心とした自然環境の保全と向上
	■ 山地保全と水資源保全の機能向上
	■ 森林生態系の健全性と活力の向上

市民が担う目標	● 森林の生産力と林業経営の向上
	● 市域の持続可能な経済発展を担う林業・木材産業活動の推進
	● 森林・林業の要請に応える住民参加の推進

山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市

伊那市の森林・自然・人材資源を中核として、里山環境を守る農林業と市民の環境活動を通じ、市民の暮らしと市域の発展に寄与します。

1. 市民生活と共生し、市民が活用できる森林であり続けます。
 2. 森林・自然環境の維持と更なる機能向上に努めます。
 3. 森林資源・自然環境資源・人材資源を育て、活かし、利用する循環社会を創出します。

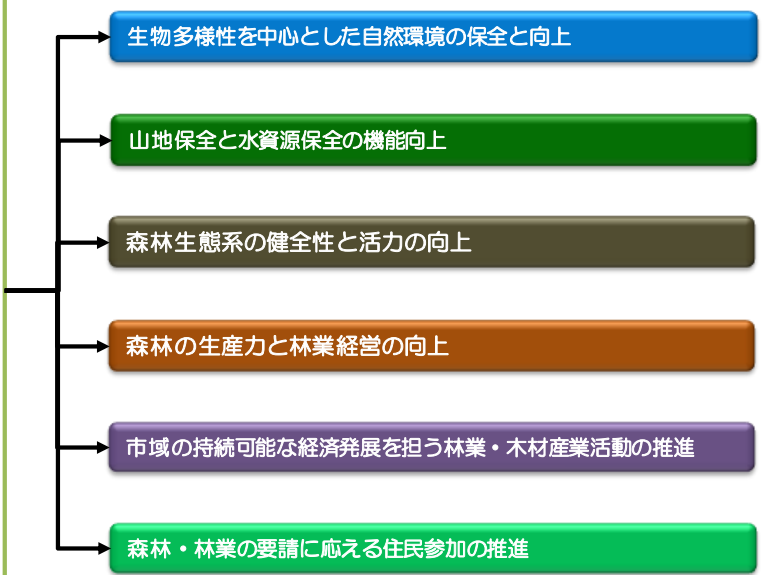


図-6 伊那市50年の森林ビジョンの理念と目標

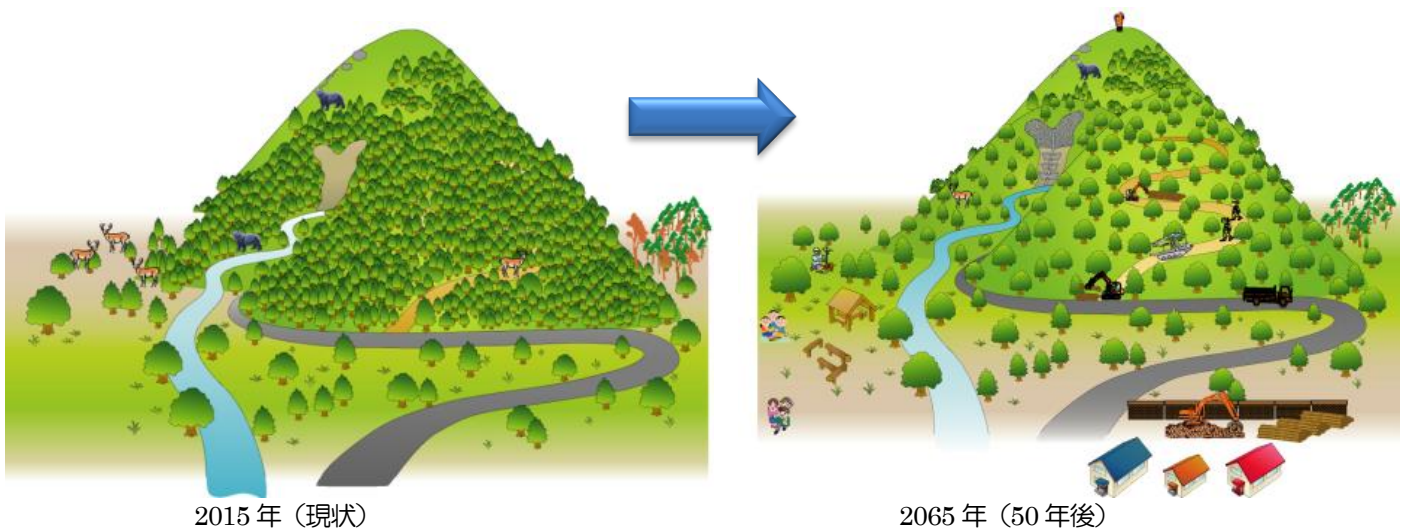


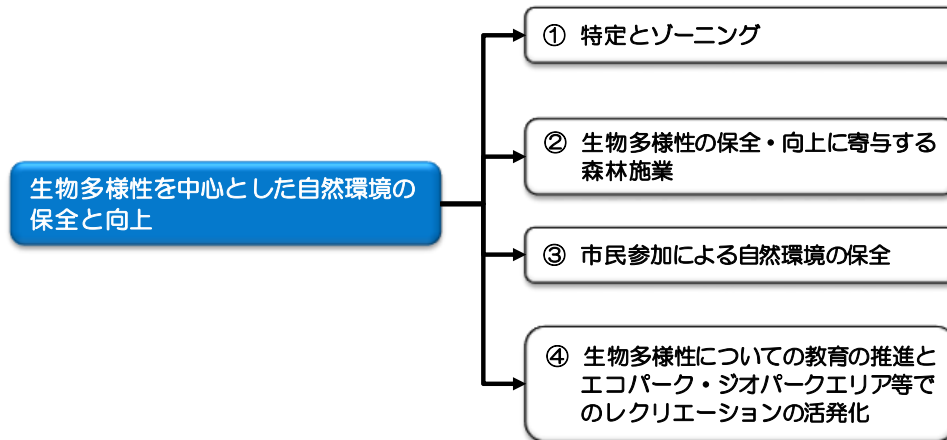
図-7 ビジョンの計画

50年の森林（もり）ビジョンの実行計画

自然・森林資源に対する目標の実行計画

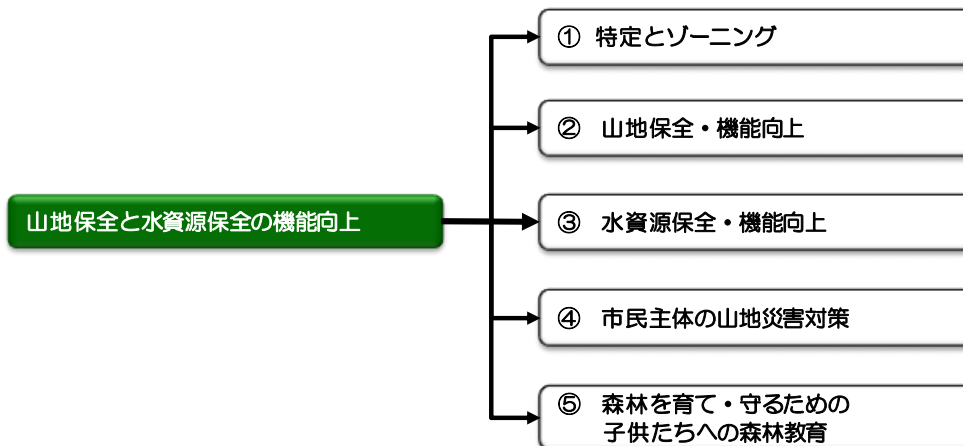
目標「生物多様性を中心とした自然環境の保全と向上」

「森林生態系の多様性」、「生物種の多様性」、「エコ・ジオ（地質・地形）の多様性」等を保全・向上させ、50年後に引き継ぐことを実行計画の基本とします。



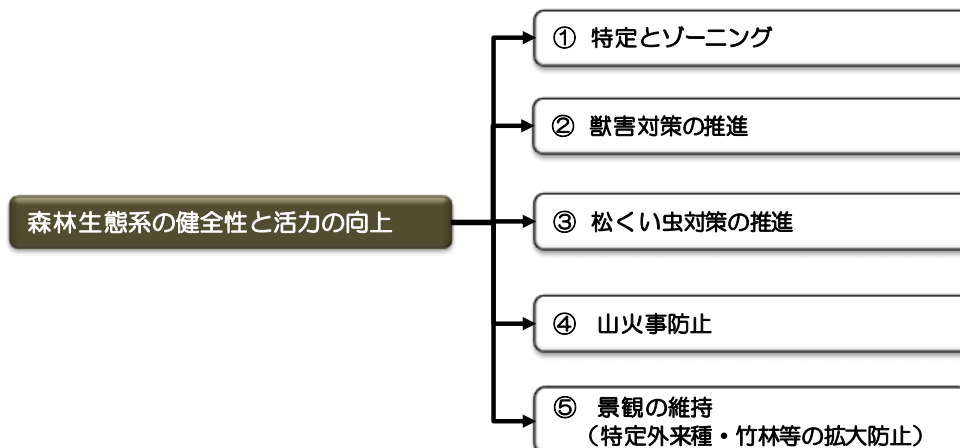
目標「山地保全と水資源保全の機能向上」

「市域の安全・安心のための森林（防災・減災）」、「水資源の保全のための森林」等を保全・向上させ、50年後に引き継ぐことを実行計画の基本とします。



目標「森林生態系の健全性と活力の向上」

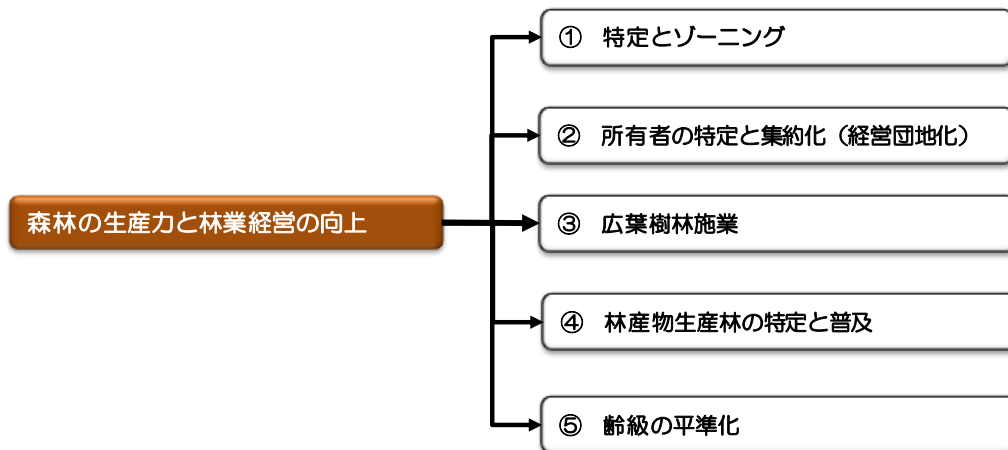
「獣害・松くい虫被害への対策と健全化」、「森林火災の防止」、「景観の維持（特定外来種・竹林等の拡大防止）」等を向上させ、50年後に引き継ぐことを実行計画の基本とします。



自然・森林資源に対する目標の実行計画

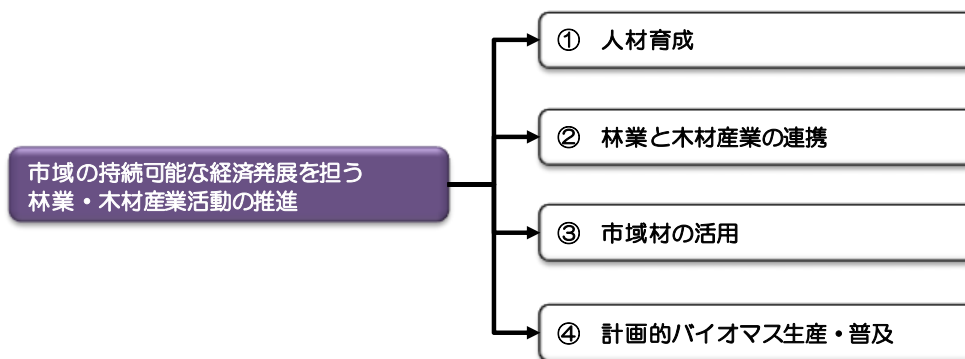
目標「森林の生産力と林業経営の向上」

「所有者の特定と集約化」、「広葉樹林施業」、「林産物生産林の特定と普及」、「林齢の平準化」等を強化・向上させ、50年後に引き継ぐことを実行計画の基本とします。



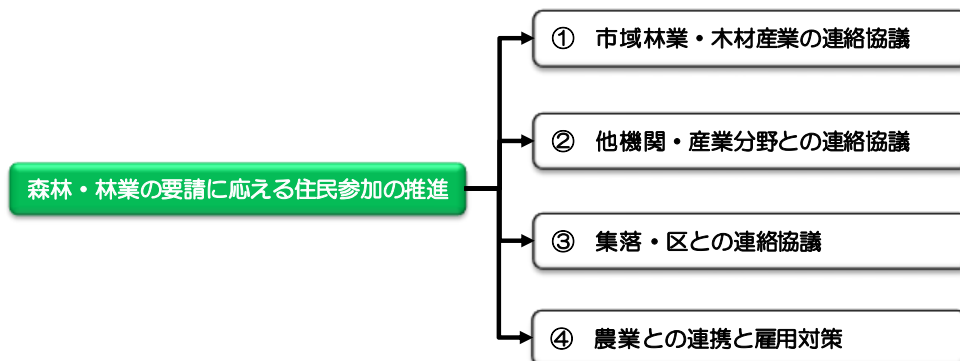
目標「市域の持続可能な経済発展を担う農林業・木材産業活動の推進」

「人材育成」、「林業と木材産業の連携」、「市域材の活用」、「木質バイオマスエネルギーの利用促進（薪・ペレット）」等を強化・向上させ、50年後に引き継ぐことを実行計画の基本とします。



目標「森林・林業の要請に応える住民参加の推進」

「市域林業・木材産業の連絡協議」、「他機関・産業分野との連絡協議」、「集落・区との連絡協議」、「農業との連携と雇用対策」等を強化・向上させ、50年後に引き継ぐことを実行計画の基本とします。



50年の森林（もり）ビジョンの推進

市民参加の実施





STEP-1

「伊那市 50 年の森林（もり）ビジョン」の目標達成に向けた第一歩となる市民の皆さんへの周知は、市が主体的に取り組みます。

STEP-2

実行計画の樹立に向けて、市が主体となって「50 年の森林ビジョン推進委員会（仮称）」を立ち上げます（図-8）。この推進委員会の構成は、有識者、林業関係者、地域・地区代表者および市とします。推進委員会では、各目標の実行計画策定部会の設置、目標達成のための広域的なゾーニングを実施します。さらに、各目標の実行計画策定部会のチェック機能を果たす位置付けとします。

運営は市が行います。事務局を伊那市農林部耕地林務課に置き、事務局に専属の職員（仮称：ビジョン推進員）を配置し、ビジョン全体を把握して、推進委員会の運営、実行計画策定部会の連絡調整、関係機関との連絡調整等を行います。

-  50 年の森林ビジョン推進委員会の設置（市民・有識者・行政）。
-  各目標の実行計画策定部会の設置。
-  各目標に共通するゾーニングの実施（基本ゾーニング）。
-  実行計画策定部会のチェック機能。

STEP-3

目標ごとに実行計画策定部会（以下：部会）を設置します（図-9）。

部会は有識者、市民等によって構成し、実行計画期間の 5 年を任期とします。市のビジョン推進員が連絡調整を行います。

STEP-4

各目標の実実施計画の策定を行うためには、林業関係者だけでは実行できないため、各目標に連携が必要な他業種・関係機関等を明らかにし、部会への参加を依頼します（図-9）。

また、市民の皆さんの積極的な部会への参加を促します。

ビジョンの推進

「伊那市 50 年の森林（もり）ビジョン」の計画期間は、**2015 年～2065 年**です。本ビジョンは、現状の課題を踏まえ、長期的な視点で目標を設定し、その目標を達成するべく、短期（計画期間 10 年）の実行計画を設定しました。短期計画の進捗をチェックとフィードバックにより、中期の計画に反映させます（図-10）。

なお、10 年後、20 年後など社会情勢の変化により、それぞれの時々で新たな課題が示されることが考えられます。その時々の課題に対し、柔軟に対応し、実行計画の再考等を行っていきます。この再考等も市民主体に実施します。

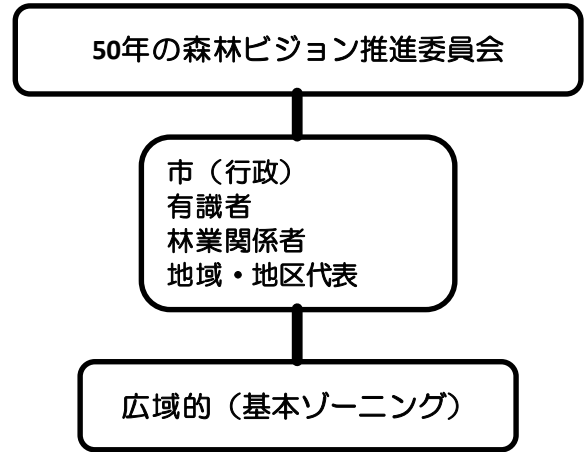


図-8 50 年の森林ビジョン推進委員会（仮称）の設置

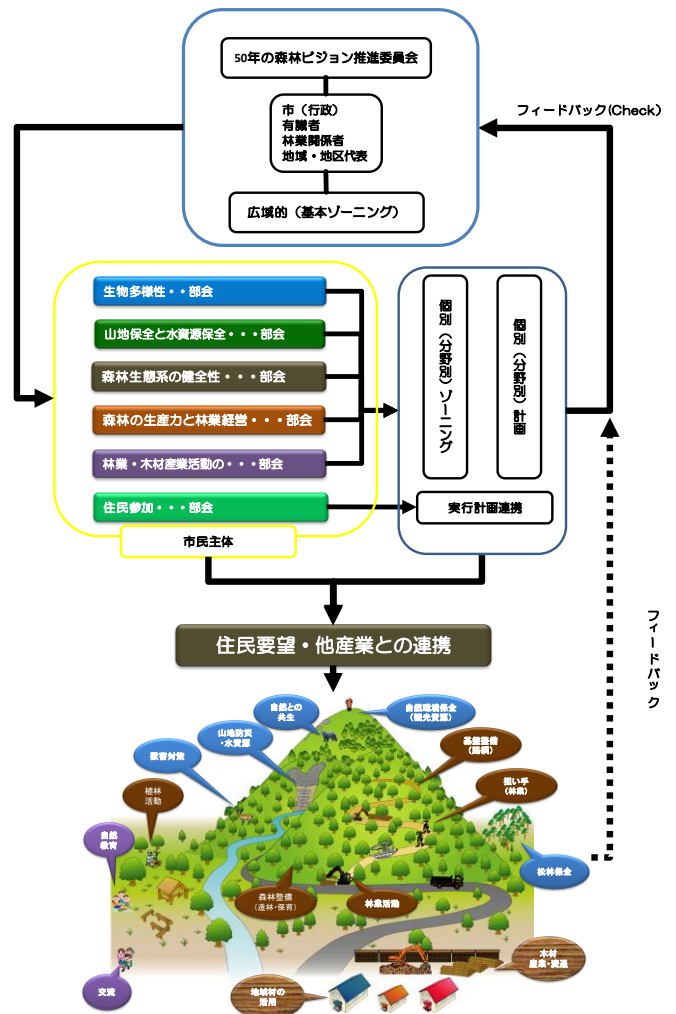


図-9 実行計画の体制整備
(50 年の森林ビジョン推進体制)

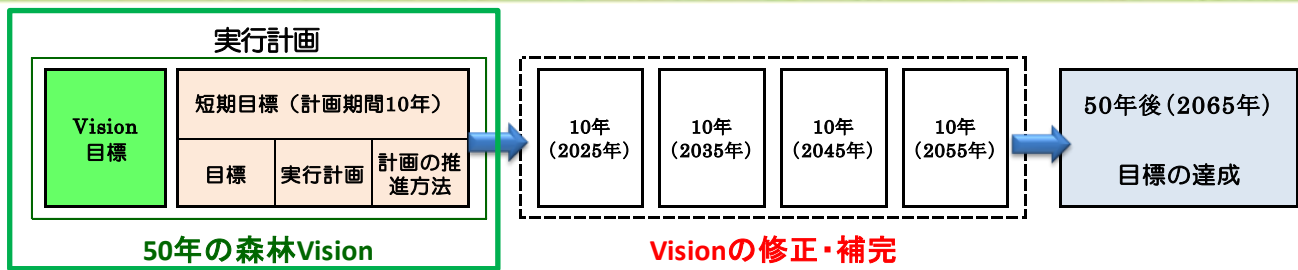


図-10 ビジョンの計画期間と実行計画

「なぜ今、森林・林業なのか？」からの脱却

魅力的な森林・林業

現在の森林・林業が魅力的でないとするならば、本ビジョンによって魅力的な森林・林業にしていきます。

ただし、ただ魅力的なだけでは、伊那市の発展に寄与しません。森林・林業が強みを持たなければなりません。強みとは「伊那林業」のブランド化としての産業であり、また他の自治体にはない「自然との共生」です。

50年後に魅力と強みを備えた伊那市の森林・林業であるようにスタートします。

林業の産業としての可能性

「50年の森林ビジョン」の策定過程で、伊那市には木材を利用する文化・風土が根付いていることが改めてわかりました。それは、既に薪ストーブ・ペレットストーブの導入が進んでいることにも現れています。また、伊那市は“ブランド”となり得る森林資源を包括し、「伊那林業ブランド」として市域だけでなく、地域外への供給も可能と考えられます。これらの潜在的資源は、循環型の連携した産業構造へと改変できる可能性があり、市域の森林・林業の活性化と、これまで築き上げてきた技術産業・農業と相まって、伊那市の産業構造を大きく変え、他の自治体には類を見ない伊那市を築き上げていく可能性が見えてきました（図-11）。

現在の林業は、伊那市の主要産業の位置付けにはありませんが、農林業システムの構築（図-12）、他産業との連携など、あと一歩の段階まで来ています。このビジョンの推進によって、10年後、50年後に林業が伊那市の産業の一翼を担う位置付けになるために、ビジョンを推進していく必要があります。



図-11 ビジョンの達成による新たな産業構造 (模式図)



図-12 ビジョンの達成による農林業システムの構築 (模式図)

新たな視点～ 若者たちの新たな視点 ～

伊那市の森林・林業の活性化、市民の皆さんの自然資源活用や森林・林業との橋渡しには、既存の観点だけでは、思うように進展しないと考えます。“若者たちの新たな視点”で、若者たちの豊かな発想を「50年の森林ビジョン」に反映させていくことが必要です。

新たな視点～ “女性の参加と女性の視点” ～

農林業などは“男性の職業”と思いがちですが、この発想も社会全体として見直す必要があります。林業においても女性の就労が始まっていますが、その割合は低い状況にあります。確かに、第一線の現場では重労働で、他産業よりも危険性を伴い、男性主体の現場となりがちですが、この労働環境や安全性の向上に「女性の就労」や「女性の視点」があれば、改善されることも考えられます。女性が参加しやすい環境を創設していくことが重要です。

また、就労、雇用対策だけでなく、市民の皆さんの自然資源活用や木材の利用などの橋渡しには「女性の目線」が不可欠です。伊那市の四季の移り変わり、自然の豊かさを心より享受している女性も多く、ご家族や友人に紹介してくれます。伊那の魅力である“食文化”や“木の文化”は“女性の視点”がなければ発展しません。料理の繊細さ、身近な住宅のインテリアなど女性ならではの美の感覚が、“新たな食文化”や“木使い”、“木製品の開発、PR、マーケティング”には欠かせません。森林・林業を考えるうえで、「男性社会」からの脱却も「50年の森林ビジョン」の推進には必要なのです。

市民による安全・安心を担う森林づくり

市民の皆さんの森林に対する意識も高く、既に「伊那市50年の森林ビジョン」の目指す地区・地域発の森林・林業、安全・安心の森林づくりを実践されている活動があります。これらを手本として、より一層の住民参加による活動の輪を広げていく努力が必要です。これらの活動により、森林を育て、守り、災害に強い森林、市民生活を守る森林として、50年後に引き継いでいけるものと考えます。

自然環境と歩む伊那市

「50年の森林ビジョン」の策定により、伊那市の森林は「自然資本」として、下記の3つのすべてを担うことができると考えます(図-13)。



図-13 50年後の森林・林業

- ★第一次産業の資源培養・産物の取得場所の維持・増進
- ★観光・保健・保養等のサービス産業の活動場所としての利用
- ★水源涵養・崩壊防止・地球温暖化防止などの公益的機能を担う場所の強靱化

これらを実現するために、次のステップである「実行計画樹立」において、森林・林業が担う役割のすべての目標で「特定とソーニング」を行う計画としています。

これにより、次のことが明確となります。

「伊那市民が手を掛ける森林」：農林業のために利用する森林。

「自然環境を復元する森林」：立地に適合した自然環境を復元・維持し、観光やレクリエーションにも寄与する森林。

「自然に委ねる＝自然に還す森林」：あまり人手をかけず、多面的機能を発揮する森林。

「ユネスコエコパーク」や「南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク」など、自然環境に恵まれた伊那市の魅力的なエリアの自然環境を保全し、後世に引き継ぐためのゾーニングが行われます。

また、林業活動の推進エリアも示す計画となるため、「守る森林」・「自然環境と共に利用する森林」・「積極的に利用する森林」などが明確になってきます。これにより自然環境と共生（共に歩むこと）ができることになります。

「森林・林業を^{とき}考える時代」から「森林・林業の^{じだい}時代」へ

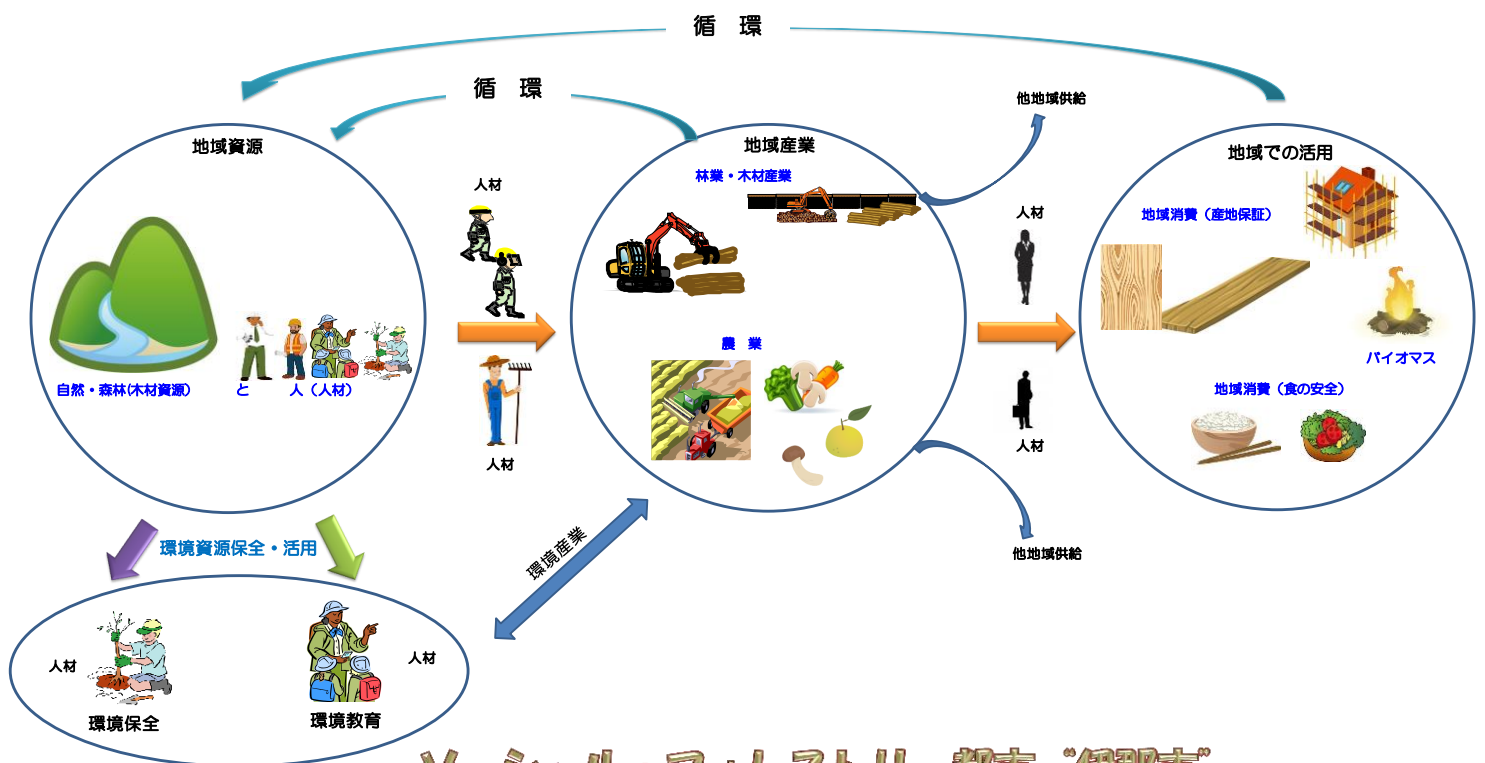
「50年の森林ビジョン」の策定では、50年前の森林・林業から振り返り、現在の課題を整理しました。そこから50年後を見据えた森林・林業のあり様を検討し、本ビジョンの策定を行っています。したがって、「森林・林業を^{とき}考える時代」はここまでとし、今後は「森林・林業の^{じだい}時代」へと進むことを願います。

「50年の森林ビジョン」では、「未来に！将来の伊那市を担う次世代からのメッセージ」の章を設け、伊那市の将来を担う皆さんの活動、メッセージを掲載しました。伊那市の学校教育は、他の市町村にはない、ユニークで、また自然に触れ合う教育が実施されています。

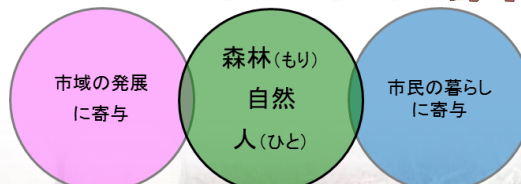
この活動を「50年の森林ビジョン」と共に継続していくことで、人材が育ち、「山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市」を築き上げると考え、また目指していくことが私たち伊那市民にとって重要です。

「山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市」を実現するために、市民全体の「ソーシャル・フォレストリー都市“伊那市”」として50年の時間軸で取り組んでいただくよう願っています。

山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市



ソーシャル・フォレストリー都市“伊那市”



～未来に！将来の伊那市を担う次世代からのメッセージ～に寄せられた活動



教育活動の源「学校林」「森の教室」：伊那西小学校



～楽しく感じて楽しく学べる！ みんなで育てる地域のしくみ～

～伊那谷 里山整備ど 地域を笑顔に～：上伊那農業高校の取り組み



東春近小学校 PTA 林に関わる活動：東春近小学校



自然の恵みを全員で：長谷小学校



森林学習～自然の恵みを体にかけて～：高遠中学校



森に囲まれた学校：西箕輪中学校

伊 那 市

お問い合わせ

伊那市 農林部 耕地林務課

〒396-8617 長野県伊那市下新田 3050 番地

電話：0265-78-4111 (内線 2416・2417)・FAX：0265-72-4142・E-mail：ktr@inacity.jp

